

誰にでも 輝くチャンスがある



足利工業大学 建築学科

わだ しょうごう
和田昇三

【プロフィール】

1949年生まれ。

75年、日本大学大学院理工学研究科修了。

82年、足利工業大学建築学科助手兼坪井善勝研究室の研究員。99年に教授。日本建築家協会保存問題委員会・委員長。建築作品に「相田みつをアトリエ」など。

「学習」のメカニズム

歴史上の偉大な人物。各分野の最先端で活躍している人々。身近なところでいえば、職場で輝いている人。つい最近、脳科学者・茂木健一郎氏の著書「脳を生かす勉強法」に出逢って、誰にでもこのような人物になれるチャンスがあることを知った。

茂木氏はその本の中で「一生懸命考えていた問題がやっと解けた。(中略)この時、あなたの脳の中では「ドーパミン」と呼ばれる物質が分泌されています。(中略)この分泌量が多いほど大きな快感・喜びを感じる事が分っています。(中略)そして、もっと効果的にドーパミンを分泌させるため、脳内では神経細胞がつなぎかわり、新しいシナプス(神経回路網)が生まれます。そのため、快感を生み出す行動が次第にくせになり、2回、3回と繰り返して続けていくたびに、その行動が上

達していく。これが「学習」のメカニズムです」と述べている。

さらに「試行錯誤を経ることで脳内に強固なシナプスが形成され、やがてひとつの行動に練達していく」と言い、これを「強化学習」と名付けている。天才棋士・羽生喜治の誕生は、この「強化学習」のサイクルがどんどん回った結果という。

すばらしい人々との出逢い

私はいままで素晴らしい方々に出逢った。代々木オリンピック体育館(1964)や大阪万博(1970)の多くのパビリオンの構造設計を担当した坪井善勝先生。足利市にある高福寺の住職、武井哲應老師。武井老師を終生の師と仰いだ書家で詩人の相田みつをさん。

いずれの方々も故人で今はもういない。茂木氏のいう「強固なシナプス」が脳内に形成されていたのであろう。自分の道を練磨し続

け、後世に偉大なものを残し一生を終えたように思う。以下、私との「出逢い」からその一端を読み取って頂ければ幸いである。

坪井先生との出逢い

坪井先生のことを知ったのは私が中学3年の東京オリンピックの年。完成間近の体育館と共に、先生の記事が新聞に掲載されていた。

おそらく、吊り橋の原理を応用した世界最初の大規模な建造物というような内容で、構造的な



国立代々木競技場
写真：兼松紘一郎

力の流れを説明していたのであろう。当時は何も理解できなかったが、先生に畏敬の念を持ったことを覚えている。私はこのことがきっかけとなって建築の道へ進んだ。

幸いなことに、大学院に進んでから坪井先生にお逢いすることができた。当時先生は大学院で教鞭を取る傍ら、[財]建設工学研究会を主宰し、高度な解析が必要とされる建築物の構造設計を手掛けていた。

大学院ではご自身で著した名著「建築弾塑性学」についての講義が行われ、毎回、膨大な枚数の手書きのプリントが配布された。プリントには本に書かれていない部分も詳細に記されており、それを基に講義は進められた。後年、分かったことだが、先生は、毎年新たにプリントの原稿を起こしていたという。今思い起こせば、私の受けた講義の中で、最も難しく、また最も解り易い講義であった。

大学院修了後は、先生の主宰する研究会へ入りたいと考えていたが、先生に直談判する勇気も無く、他の建築構造の設計事務所へ就職した。6年後坪井先生の仕事を手伝う機会に恵まれ、そのご縁もあり、私は翌年から故郷の足利へ戻り足利工業大学で教鞭をとることとなった。先生は同大学の建築学科創設に当たって尽力され、顧問教授となっていた。

武井老師との出逢い

足利では、小学校から同級の武井全補氏が、北欧から帰って高福寺の副住職になっていると聞いていた。寺は禅寺で父親が立派な和尚さんであることは噂で知っていた。

私は、東京での生活に疲れていたのであろう、足利に帰るとさっそく高福寺の坐禅会に参加した。日曜日の朝6時半から30分間の座禅。般若心経を唱えた後、本堂脇の座敷でお茶を飲みながらの武井哲應老師の法話。やさしい語り口で話される老師のお言葉に、心の中で何度も何度も頷く自分がいた。毎日曜日、坐禅と老師のお話をお聞きするため高福寺に通い続けた。

また、月1回、第4日曜日の「眼蔵会」にも通い続けた。夜7時から50分間の坐禅。8時から2時間余り、曹洞宗の開祖道元禪師が著した正法



武井哲應老師

眼蔵の提唱。内容はほとんど分らなかったが、ただその場にいるだけで満ち足りた気分になった。老師は晩年になると体調を崩され昭和

61年（76歳）の提唱が最後となり、62年に遷化された。昭和32年から始められた提唱は332回となり、その提唱録が法嗣の全補和尚により順次まとめられ、現在まで8冊の本が出版されている。

相田みつをさんとの出逢い

高福寺の坐禅会に行き始めてから、しばらく経って相田みつをさんから「円融便り」を頂き、はじめてその名を知った。「円融便り」は自らが主宰する円融会の会報でほぼ2ヶ月に1回配布されていた。B4判より少し大きめの用紙1枚に、表に武井老師随聞記、裏面に自作の詩が載っていた。坐禅会や「眼蔵会」での老師のお話を皆さんに伝えたいという思いから、相田さんが50歳の頃発刊したという。

初めて頂いたのは57年7月発行の44号で、それ以降、円融だよりの発行を待ちわびた。いずれの号も、老師から発せられたお言葉が、その場においてお聞きしているかのようにであった。また、「円融便り」を読むことにより、自分の中を素通りしていた老師のお話が、ストンと心の中に落ちた。

最後に頂いたのは平成2年4月発行の76号で、亡くなる1年前であった。武井老師の正法眼蔵「葛藤の巻」^{注1)}が出版されてまもなくで、円融便りには、この巻に出てくる達磨大師の「皮肉骨髓」^{注2)}の話が掲載されていた。

その円融便りは、表題に「亡き師の教え 自分の世界を」とあり、そして最後はご自身の言葉で「みかんはみかんという自分の花を咲

かせ、自分の実を実らせることです」^{注3)}と結んでいる。なんたる自信であろう。そこに、最晩年になって、自分の世界を切り開いた相田みつをさんの姿が重なって見えた。

いまから ここから

再び、前出の本に戻りますが、茂木氏は「ドーパミンによる強化学習のサイクルが回ることで人間は誰しも境遇や年齢、性格などに関わりなく、飛躍



書・相田みつを

的な成長を遂げたり、劇的な変化を遂げる可能性を秘めた存在である」とも言っている。

これは私たちに凡人にとって大変うれしい文言である。「もう遅いのでは？」などと諦めることはない。相田さんの言葉ではないが「いまから ここから」、しっかりとした目的意識と堅固な意志を持てば、誰にでも輝くチャンスがあるのだから。

注1) 武井哲應、達磨を生きる—正法眼蔵葛藤を語る—、開山堂出版、1989

注2) 達磨大師が4人の弟子に「自分が修行して得たことを述べてみよ」と問うた時の話。達磨大師は4人の弟子から返答を聞いて、それぞれに、自分の「皮」、「肉」、「骨」、「髓」を得たと言ったという。

注3) 4人の弟子のうち「髓」を得たといわれた慧可の答え「礼三拜後、依位而立」を、相田さんのことばで表現している。